

令和2年2月25日

富良野市議会議長 黒岩岳雄 様

総務文教委員長 佐藤秀靖

委員会事務調査報告書

令和元年第4回定例会において、継続調査の許可を得た事件について、下記のとおり結果を報告します。

記

1. 調査案件
調査第4号 高齢者教育について
2. 調査の経過及び結果
別紙のとおり

調査第4号

高齢者教育について

総務文教委員会から、令和元年第4回定例会で許可を得た、調査第4号「高齢者教育について」の調査の経過を報告する。本委員会では、担当部署に資料の提出と説明を求め、富良野市が取り組む高齢者教育の現状を把握し、直面する課題と対策について調査を進めてきた。

我が国においては、昭和45年以降高齢化が徐々に進み、世界に類を見ない早さで急速に高齢化が進行し続けており、国や自治体は高齢者対策が大きな課題となった。その高齢化対策は医療・福祉についての対応が先行したが、高齢者の健康づくりや生きがい対策も必要であるとの認識が広がり、高齢者教育へとつながった。

高度経済成長期からバブル期、平成のバブル崩壊、低成長時代、情報化社会の到来と経済環境、生活環境の劇的な変化を経て、高齢者教育においても高齢者を取り巻く様々な社会環境の変化と、高齢者自身の「高齢化」に対する意識の変化や「高齢者」という社会的概念の変化および健康寿命の延伸による長寿社会における高齢者教育に対する概念やアプローチも変化している。

現在、本市における高齢者教育は第7次社会教育中期計画(平成28年～平成32年)において「健康で生きがいのある心豊かな生活を支援する学習機会の充実」を事業目標に掲げており、現状については「高齢者自らが、知識や経験を活かした社会的な役割を果たし、心身の健康の維持・増進に努め、生きがいを持って豊かな生活を送ることが出来るよう高齢者教育の充実が今後ますます重要になっています。」としており、推進項目を5点掲げ、具体的施策を明示している。

本委員会では、高齢者教育における上記の経緯と現状を把握し、本市における高齢者教育についての今後の在り方について調査・議論を進め、下記の2点について委員会として意見の一致を見た次第である。

1. 高齢者教育の今後の在り方について

近年、超高齢化が進行し60～70歳はまだまだ現役世代であり、リタイアして隠居生活を楽しむという認識が薄れてきている状況に鑑み、地域社会と積極的にかかわりを持ち高齢者の知識と経験を地域の課題解決に活用するなど、高齢者の活躍の場を提供することが重要である。

健康寿命の延伸で長寿社会となり、旧来の教育や価値観の影響を受けず新しい価値観をライフスタイルに生かして様々な活動に積極的に参加する「アクティブシニア」と呼ばれる65歳以上のシルバー世代が台頭し、個々のニーズも多様化している。個人的な趣味を楽しむ方法や仲間と楽しむサークル活動、社会の変化に対応し自立して生きていくための知識を得る学習や、60歳代、60歳後半～70歳

前半、75歳以上など、年代別に抱える問題を解決・共有する様々な学習機会を提供・支援する必要がある。

そのためには高齢者のニーズの把握が何よりも重要であるため、アンケート調査や他市町村の取り組みを参考に、時勢に応じた学習機会の提供を模索すべきである。

また、その際は個人の生活に必要な知識の習得や自立のための学びとして、医療や介護の基礎知識・地域参画や社会貢献の学び・情報化社会への順応など系統立てた教育計画が必要であり、教育委員会が所管する社会教育という考え方のみならず健康増進や高齢者福祉、市民協働といった観点での支援が必要であり、庁内の部局横断的連携が不可欠である。

2、ことぶき大学について

ことぶき大学は昭和47年に富良野校が開設されてから48年が経過しているが、近年、生徒数が減少傾向にあり、その在り方が問われている。

高齢者の生活環境の変化および余暇の過ごし方が多様化している現状において、抜本的改革が必要と考える。すなわち、名称が「ことぶき大学」、対象が「60歳以上」など開設当時から変わっていない。高齢者＝ことぶき＝隠居生活＝60歳以上は現代では成り立たない状況にある。

また、修業年限やカリキュラムにおいても一定の選択肢があるものの定型的なものになっているため、修業年限が長いことやカリキュラムの選択に制限があることなどから入学を躊躇するといった声も聞かれることから、工夫が必要である。

例えば、カリキュラムは数ある講義の選択単位制にすること、講座は庁内各局側が主催する講演会・セミナー・勉強会などを、ことぶき大学の公開講座として修得単位に組み込み可能とするなど、柔軟な発想と仕組み作りが必要である。